
Phantom Buster K～Phantom Buster MIYU Episode.EX～

ともゆき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Phantom Buster K\Phantom Buster MIYU Episode EX\

【Nコード】

N2325J

【作者名】

ともゆき

【あらすじ】

2011年のある日、妖魔退治を終えた直後に瀬川美由が突然倒れ、原因不明の意識不明に陥ってしまった！ 弟の和也は姉を助けるために単独で調査を始めるが…。「Phantom Buster MIYU」外伝ストーリー2作目にして（一応の）シリーズ最終作。

・プロローグ

2015年6月のある日の夜。

明かりが点いた部屋の中で一人の若者が椅子に腰掛け、机に頬杖をついて何やら考え事をしていた。

不意に、彼は壁に置いてある本棚に立てかけてある一振りの剣に視線を向ける。

「…もう6年になるんだな…」

瀬川和也、18歳。この春から大学生となったばかりだった。

彼は8年前に「覚醒」と呼ばれる段階を迎え、6年前に中学校に入学したときから姉の美由と共に「ファントムバスター（PB）」と呼ばれる妖魔退治業をしていた。

彼の視線の先にある剣は美由と組んでPBをはじめたとき、「和也は男の子なんだから」と彼女から渡された剣で代々PBだった和也の祖父、そして父親と受け継がれ、そして自分の前にはその姉が使っていた神剣だった。

この6年間、使い続けて来たこともあってか、最初の頃はなんとなく振り回されていたような気がした神剣も、今では自分の手足のように扱えるし、愛着も持っている。

しかしそんな姉弟の二人でやっていたPBの仕事にも去年の秋に一大転機が訪れることとなった。

和也自身はすでに姉の口から直接聞いていて知っていたのだが、美由が両親に、会社で知り合った同僚の男性と結婚したい、と打ち明けたのだった。そしてすでに求婚をされている、ということも。

その後いろいろあったが、結局両親も最後には納得したようで、美由は結婚に向けての準備を始め、今年に入ってからPBとしての仕事を和也一人に任せ、自身は現場を離れたのだった。

「和也はもう一人で大丈夫だし、自分のことは心配しないでPBに打ち込んで欲しい」と美由に言われていたこともあり、さらに和也自身も大学の入試や高校の卒業といったことがあったし、春からは大学に通う傍ら、PBとしての仕事もあって忙しい日々を送っていたが、ようやく最近、その忙しさにもひと段落がついたような気がした。

＊

「…いよいよ明日か」

和也は剣の先の方にある壁を見る。

その壁の向こうの、あらかた荷物を運び出した部屋には、彼の姉である美由がいるはずである。

そして明日、美由は結婚式を行い、24年間育ったこの家を離れていく…。

寂しくない、と言ったら嘘になる。

自分が物心ついたときからずっと自分のそばに姉として美由がいたのだし、さらに和也が中学に入り、「覚醒したら一緒にPBをやる、とお父さんたちと約束したことだから」と美由が彼の先生となって、ともにPBを始めるようになってから、6年近い月日を二人で行動していたのだ。美由が現場を離れて半年近く経ち、最近ようやく一人だけの状況にも慣れては来たが、やはりまだ少し違和感が残っている。

現場を離れてからも美由はことあるごとに相談に乗ってくれたし、「結婚してからも何か困ったことがあったら遠慮なく相談に来て欲しい」とは言っているのだが、結婚して家を離れる以上、美由には美由の生活があるだろうし、そうちよくちよくと行けるものでもない。これからは自分ひとりで考え自分ひとりで判断を下さなければならぬことが多くなることも実感はしていた。

＊

和也の脳裏にいろいろなことが思い浮かんできた。

危険を顧みず姉を助けるために初めて妖魔に立ち向かい、結果的に自分が覚醒することになった日のこと、それから二人で組むようになり時には姉として、時にはパートナーとして彼女からさまざまなアドバイスを受けたこと、そして美由の勧めで一人だけでPBとして戦う決意を固めた日のこと…。

「…そういえば、あの日が結果的に初めて一人で妖魔と戦った日になるのかな」

和也の脳裏に4年前、自分が高校受験を控えた中学3年生の頃に起きたある出来事を思い浮かんだ。

（本編に続く）

・プロローグ（後書き）

（作者より）この作品に対する感想等がありましたら「ともゆきのホームページ」BBS（<http://www5e.biglobe.ne.jp/~t-azuma/bbs-chui.htm>）の方をお願いします。

・前編

2011年7月のある夜。

「和也、準備できた？」

階段の下から声が聞こえた。

「うん、いつでもいいよ！」

そう言うと和也は机の傍らに立てかけてあった一振りの剣を取る。

「それじゃ行くわよ！」

下から又声がした。

「うん、わかった！」

そして和也は自分の部屋を出ると階段を下りていく。

瀬川和也、14歳の中学3年生。

この時期になるとそろそろ高校受験というのが気になる頃で、和也自身もそろそろ志望校を考え始めている時期なのだが、実は彼にはもう一つの顔があった。

実は彼は、姉の瀬川美由と共に「ファントムバスター」(PB)と呼ばれる妖魔退治業をやっているのだ。

彼がPBとしての能力として目覚めたのは4年前、小学5年生のときの秋だったのだが、両親の勧めもあって実際にPBをやるようになったのは、中学に入学する少し前からだった。

和也と同じように中学に入ってからPBをやるようになった姉の美由が「お父さんたちに頼まれたから」ということで和也の先生となり、彼女の手ほどきを受けながらPBを続けてすでに2年半。

最初に姉と組んでPBをやった日にいきなり一振りの剣を渡されて「和也は男の子なんだから剣のほうを担当しなさい」と美由に言われたときはさすがに戸惑ったし、それからしばらくの間は右も左もわからずただ姉に言われるままにやっていたような気がするが、この仕事に慣れた頃からは少しだけ自分にも自信がついてきたよう

な気がする。

＊

玄関を出ると、すでに一台の車が停まっていた。

美由が高校を卒業し、自動車運転免許を獲得したのとはほぼ同じく購入した車で、普段は美由が通勤に使っているのだが、P Bの仕事があるときはこうしてこの車で現場に向かうのだった。

助手席の和也がシートベルトを締めるのを確認し、美由は車を走らせた。

車を走らせてしばらく経ったときだった。

美由は助手席の和也を見ると、

「…どうしたの、和也？」

「…え？ どうした、って？」

「いや、なんか和也、いつとなんとなく様子が違うからさ」

「そんなことないよ」

「…そう？ 和也と一緒にP Bやるようになってだいぶ立つけど、なんだかいつもの和也と違ってなんだか考え込んでいるような感じがしたからさ」

「だから何でもない、って」

「それならいいんだけど…」

実は、和也は口ではああ言ったが何となく不安を感じていたのだ。何か自分か姉の美由にとんでもないことが起こるのではないか、そんな不安がするのだ。

今までそんなことは一度も感じなかったのに…。

（…変な事が起こらなければいいけど…）

と、

「和也、着いたわよ」

美由の声に和也が現実に戻る。

「…ここか…」

目の前に建っているビルを見て和也が言う。

「…そうらしいわね。見てよ」

そういうと美由は和也に神鏡を見せる。

そう、神鏡の真ん中にはまっている宝石が輝いていたのだった。

この神鏡は二人の母親である由紀子の家に代々伝わっている神鏡で父親の神剣と共に美由が受け継いだのだが、和也に神剣を引き継がせてからは美由は神鏡だけを使っているのだった。

その神鏡は妖魔が近くにいるとき、裏面にある宝石が光を放つ、という特徴を持っていたのだった。

そして美由はポケットに神鏡をしまい、ビルに向かって歩きかけたが、隣に立っている和也を見る　と、

「和也、どうしたの？」

そう、和也がその場に立ち尽くしたままだったのだ。

「和也、和也！」

その声によりやく和也が気がついたようで、

「ん、何？」

「何、じゃないわよ。なんだかさつきからブーツ、としてて。そんな様子だったらどうなるかわかってるでしょう？　とにかく行くわよ」

「う、うん」

美由の声に和也は頷くと、いつでも神剣を出せるように身構え、と、ビルの中に入っていた。

＊

そして二人は慎重に階段を上っていった。

和也はいつでも神剣を抜けるように準備すると、美由に向かって頷く。

美由も頷き返すとドアをゆっくりと開け、二人で屋上に出た。

そして二人は背中合わせに立つとあたりを見回す。

こうすることで二人の背後に隙ができないように、と美由が編み

出した方法だったのだ。

それから程なく、

「来たわよ！」

不意に神鏡を片手にしていた美由が叫んだ。

その声に和也は鞘から神剣を抜くと2人の目の前に一匹の妖魔が襲い掛かってきた。

美由があたりを見回すと先ほど自分たちが入ってきたドアの上に蛍光灯が点灯していたのが目に入った。

「和也、あそこまで誘導して！」

美由の指示に和也が頷くと、ドアの方に向かって走り出した。

妖魔が和也を追ってドアの方に向かってくる。

美由はそれを確かめると鏡面に蛍光灯の光が当たるように、神鏡を傾け、その反射した光を妖魔に向ける。

その光をまともに目に受けたか、妖魔が一瞬ひるんだ。

「和也、今よ！」

その声に和也を聞いた和也が神剣を袈裟懸けに妖魔に切りつけた。妖魔が悲鳴を上げるのを合図にしたかのように美由が鏡面を妖魔に向ける。

そしてその中に妖魔が吸い込まれていった。

(…やった！)

和也がそう思ったときだった。

「和也！」

いきなり美由の声がしたかと思うと和也の前に立ちはだかった。

「どうしたの？」

和也が聞いたその瞬間、一筋の光が二人に向かって飛んできた。その光は和也の前に立っていた美由の体の中に吸い込まれるように消えていった。

そして次の瞬間、美由はばたん、とその場に倒れこんでしまった。

「…お姉ちゃん！」

和也が駆け寄る。

「お姉ちゃん！ お姉ちゃん！」

和也が呼びかけるが美由はまったくと言っていいほど反応しない。かすかに吐息の音は聞こえるので、生きていることはわかるのだが、和也がいくら呼びかけても反応しないのだった。

和也は美由の胸ポケットから携帯電話を引っ張り出す。和也はただ携帯電話を持っておらず、何か連絡があるときはこうして姉の携帯電話を借りていたのだった。

そしてメモリーを呼び出す。

「…もしもし」

「…和也、どうしたの？ そんなに慌てて」

携帯電話の向こうから由紀子の声が聞こえてきた。

「お姉ちゃんが大変なんだ！」

＊

それから20分近く経ったとき、階段を上る音が聞こえてきた。

「和也！」

そう、やってきたのは二人の両親である義和と由紀子だった。

「…和也、それでお姉ちゃんの様子は？」

由紀子が聞く。

「それが…、あれからいろいろとやってみただけど…」

そういう和也の傍らには美由が倒れていた。

由紀子が美由のそばに近寄り、いろいろと様子を見るが、どこも言って変わったところはなく、単に眠っているようにも見えた。

「…それで、一体どうしてこんなことになったんだ？」

義和が和也に聞く。

「それが…」

和也が美由が意識を失い、倒れてしまうまでのことを手短かに話した。

「つまり、退治して安心した一瞬の隙を突かれた、ということにな

るのね」

「…和也も2年半PBやってるんだからわかるだろう。妖魔退治というのは最後まで気を抜いてはいけないんだ。実際お父さんやお母さんだって、何度も危険な目にあってきているんだぞ」

義和がそう言うのと由紀子が二人のほうを向いて

「あんまり和也を責めちゃダメよ。美由だってそれをわかっていたから、和也をかばって自分がああいう目にあってしまったんだから」
「…それで美由のほうはどうなんだ？」

そう言いながら義和も美由のそばに近寄る。

「…まったく駄目。何の反応も見せないわ。これじゃ私たちでもどうしようもないわ」

「それで、どうするんだ？」

「どうすると言われても…。とりあえず美由を病院にでも連れて行くしかないでしょう」

「…そうだな。よし、和也、お姉ちゃんを病院に連れて行くから手伝ってくれないか？」

「うん」

「…じゃあ、美由の車は私が運転していくから」

「頼むぞ」

結局そのまま美由は入院することになった。

しかし、である。当然のことながら医師は色々と美由の体を調べたのだが、どこもおかしくなっている部分はなく、傍目からは単に眠っているだけのような感じだったのだ。

もちろん、医師は義和や由紀子から事情は聴いたのだが、「そうだとすると、とてもではないけれど現代医学では太刀打ちできない問題」ということで様子を見てみるしかない、という話だった。

いくらPBが社会的に認知されているとはいえ、PBが相手としている妖魔に関してはまだまだ現代社会が解明できないことが多いのである。

＊

そして美由は入院して以来、和也はほとんど毎日のように美由の見舞いに病院へと通っていた。

もちろん和也には何の責任もないのだが、あの日以来まるっきり目を覚まさない姉の姿を見ると、姉がこうなってしまったのは自分のせいではないか、と和也は思っていたのだった。

そして美由が入院してから1週間が過ぎた。

今日も和也は病院に来てベッドの傍らの椅子に座り美由をじっと見ていた。

夏休みも間近、ということもあってか学校が終わってからまだ日は高く、気温も高いためか、病院の中は冷房が効いている。

しかし、そんな涼しさも感じているのかいないのか、ベッドの美由は相変わらず目を閉じたままである。

一応点滴は打っているので美由の様態が悪化すると言った心配はないのだが、こうしてまったく意識の戻らない姉を見ると、なんだか悲しくなってくる。

と、

「：あら、今日も来てたのね」

病室の入り口で一人の女性の声がした。

振り向くと、ひとりの女性看護師が立っていた。

「あ、こんにちは」

和也は挨拶をする。

もう一週間も病院に通い詰めということですからその看護師とも顔なじみになっていた。

「：もう一週間経つのね。早くお姉ちゃんよくなるといいわね」

そう言いながらその看護師は美由の検診をする。

そのときだった。

「…！」

思わず和也は何か「感覚」のようなものを感じた。

何故かはよくわからない。しかし両親や姉の美由がそうであったように和也も、時々こういった不思議な「感覚」が出てくるのだ。

「…どうしたの？　鳥肌なんか立てて。そんなに冷房効きすぎてるかしら？」

そんな和也を見て看護師が話しかけてきた。

「い、いえ、大丈夫です」

そう、冷房は病人のことを考えてかそれほど冷えてはいないはずなのだが、和也の腕に鳥肌が立っていたのだった。

「そう。…それじゃ、そろそろ面会時間も終わりだから家に帰ったほうがいいわよ」

「…そ、そうします。それじゃまた明日」

そういいながら和也は鞆を持つと足早に病室を出て行った。

＊

病院の外に出ると、和也は病院の建物の方を振り返る。

「…なんだったんだ、今のは？」

そう、和也はあのときに起こった「感覚」がまだ体の中に残っているような気がしたのだ。

（…どうしてあのときにあんな感覚が起きたんだ？　まさか！）

和也の脳裏にあるひとつの「可能性」が思い浮かんだ。

（まさか、そんなことは…。でもそうとしか考えられないよな。…

これは調べてみる必要があるかもしれないな）

和也の心の中にあるひとつの「決意」が浮かんだ。

（後編に続く）

・前編（後書き）

（作者より）この作品に対する感想等がありましたら「ともゆきのホームページ」BBS（<http://www.e.biglobe.ne.jp/~t-azuma/bbs-chui.htm>）の方をお願いします。

・後編

「…ただいま」

「お帰りなさい」

和也が玄関のドアを開けると、台所から由紀子の声がした。

和也はそのまま台所の方へ行く。

「お姉ちゃんの具合はどう？」

「相変わらずだよ」

「…そう。もうあれから1週間も経つのは何の反応もないなんて…。もしかしたら、美由の身体に入り込んだと言う妖魔の力がよほど強力なものなのかもしれないわね」

「…それでなんだけれど、ちょっと気になることがあって」

「気になること？」

これを聞いた由紀子は家事の手を止めると、和也に向き直った。

そして和也は自分が感じた「感覚」のことについて話す。

「…それで、その感覚について、何か他に気づいたことはないの？」

「気づいたこと？」

「何でもいいのよ。お母さんだってPBやっていた頃は妖魔が近くにいるとそういう感覚がしょっちゅう起きていたし、お姉ちゃんも同じ感覚をよく感じているじゃない」

由紀子が言う。さすがにこのときは「母親」としてだけではなく、美由や和也の「先輩PB」として気になることがあるようだ。

「…ボクがいつもお姉ちゃんのお見舞いに行っているときに起きているんだ。…ひょっとして」

「何かに気づいたの？」

「…いや、もしかしたらボクの考えすぎかもしれないし。…お母さん、このことに関してはボク一人で調べたいことがあるんだ」

「大丈夫なの？」

「大丈夫だよ。ボクだってお姉ちゃんと2年も一緒にPBやってる

んだし、それに…」

「それに？」

「いつもお姉ちゃんに助けられてばかりだから、たまにはボクがお姉ちゃんを助けてやりたいんだ」

「…お姉ちゃんを、助ける？」

そう言う和也に何か決意のようなものを由紀子は感じた。

(…いつの間に、この子もこんなことを言うまでに成長したのかしら…)

姉の美由に付いてPBを始めてから数々の修羅場を潜り抜けて来たこともあってか、和也も着実に、一人前のPBとして成長を続けているようだ。

「…わかったわ、和也の好きなようにやりなさい。ただし、十分に気をつけなさいよ。もし少しでも危ないな、と思ったらお父さんやお母さんに知らせるのよ」

「わかってるよ」

＊

そして翌日の学校帰り。

和也は「瀬川美由」とプレートが嵌まっている病室の前に来ることができた。

扉を開け、病室の中に入る。

「…お姉ちゃん、今日も来たよ」

和也はベッドの上の美由に話しかける。

しかし、美由は相変わらず和也の声に応えるわけでもなく、ベッドの上で微かに寝息を立てている。

和也はいつものように椅子を引っ張り出すと、そこに腰掛ける。

それから程なく、

「あら、今日も来ているのね」

美由の病室の扉が開き、一人の看護師が入ってきた。

「あ、こんにちは」

和也が何気なく挨拶を交わしたそのときだった。

(…!)

和也は何か「感覚」のようなものを感じた。

(この感覚は…。昨日と同じ感覚だ…)

なぜここに来て昨日と同じ感覚が起こったのか、何か共通点はないだろうか？

(…まさか!)

「…？ 君、どうしたの？」

看護師が不審に思ったか和也に聞く。

「い、いえ、何でもないです」

そういつて和也は繕うが、昨日と同じ「感覚」の原因がひとつだけ思い当たることに気づいた。

やがてその看護師が病室を出て行った。

和也はそれを確かめると、美由のベッドの脇の引き出しを開ける。

「…やっぱり…」

そう、引き出しの中にある神鏡の真ん中に嵌まっている宝石が光を放っていたのだった。

和也は神鏡を取り出すとじっと眺める。

そう、自分がPBとして「覚醒」するきっかけとなった4年前のときと同じように神鏡が自分に話しかけているような気がしたのだ。

「…もしかしたら…」

そう、思い当たることはただひとつ、母親の由紀子の言う「美由の身体に入り込んだと言う妖魔」をあの手が看護師が操っているのではないか、と思ったのだ。

実力のある妖魔は人間に憑依したり、人間に姿を変えることが出来るという。もしあの看護師が同じように人間に姿を変えていたとしたら…。

「…お姉ちゃん…」

和也はベッドに眠っている美由を見る。

「…もう少しだけ待ってて。必ず助けてあげるから」

＊

そしてその日の夜のことだった。

「…それじゃ言ってくるね」

玄関の前で和也は見送りに来た義和と由紀子に言う。

「十分に気をつけるのよ」

「いいな和也、深追いするんじゃないぞ。もし敵わないと思ったらすぐに逃げるんだぞ」

「わかってるよ」

そして和也は玄関のドアを閉め、

「よし、行くぞ！」

己に気合を入れるかのように叫ぶ。

病院の「急患入口」と書かれたドアが見える物陰に和也は立っていた。

さすがに夜となると、病院には自由には入れないからである。

和也は右手に持った神剣を握りなおした。

そしてあたりを見回すと、急患入り口から病院の中に入っていた。

そして慎重に病院の階段を昇って行く。

ある階に来たときだった。

ふと和也はある病室に視線を向ける。

そう、その先には美由の病室があるのだ。

しばらく和也はそこに立ち止まっていたが、再び階段を上っていた。

＊

いつの間にか和也は病院の屋上に出ていた。

そしてあたりを見回す。

「…誰もいないのかな…？」

と、そのとき、和也はズボンのポケットの中で何やら「反応」を

感じた。

そしてポケットから神鏡を取り出した。

そう、自分の考えを確かめたくて昼のうちに姉の病室から神鏡を無断拝借していたのだった。

「…これは…」

そう、昼間見たのと同じように、神鏡の宝石が光っていたのだ。と、

「…まさか君だったとはね…」

和也の背後で声がした。

和也が振り向くと、一人の看護師が立っていた。

「…確か君は…」

看護師が言っていると、

「そうだよ、瀬川和也。…瀬川美由の弟だよ」

「屋上に誰かいるかな、と思って来てみたら、こんなことだったとはね…。前に君たちを見たときは、お姉さんの方が目立っていたけれど、君も一応PBだったのね」

「…一体何のつもりなんだよ？」

「何のつもり、って？」

「…妖魔を操って、お姉ちゃんの身体をのっとるなんて、どういうつもりだよ」

「決まってるじゃない、PBが妖魔だけよ。PBっていつも私たちのすることを邪魔してるじゃない」

「…妖魔、ってみんなそう言うんだよね。一体何を企んでいるのかわからないけれど、自分がやりたいことをやるために、大勢の人をひどい目に遭わせて…」

「随分と一人前のことを言うのね。前に君たちにあったときに見たけれど、私から見れば君はPBとしてはまだまだといったところよ」
「…だからと言って、お姉ちゃんを助けられないわけには行かないんだよ」

「…面白いわね。私が倒せるかしら？」

そう言うとその看護師の姿が見る見るうちに禍々しいもの——妖魔——に変わっていった。

和也はそれを見ると神剣を抜く。

そして妖魔は和也に向かってその手を振り下ろす。

すんでのところでは和也は攻撃をかわすが、妖魔はその手を休めることなく和也に襲い掛かってくる。

これで美由と一緒にやっているのならば、美由が注意を自分にする、と言ったようなやり方で和也の手助けをしてくれるのだが、さすがに一人だと勝手が違い、和也は防戦一方になってしまった。

＊

妖魔が和也に向かって腕を横殴りに降る。

和也はそれをよけようと横に飛ぶが、かわしきれずにひっくり返ってしまった。

その弾みにポケットに入っていた神鏡が転がり落ちてしまった。

「：しまった！」

そのときに和也に一瞬の隙が出来てしまったか、妖魔が和也に襲い掛かる。

何とか和也は妖魔の攻撃をかわすが、次第に追い詰められていった。

（：まずい！ このままじゃやられる！）

その和也を見てか、妖魔が大きく腕を振り上げたそのときだった。和也のポケットから転がり落ちた神鏡が、病院の屋上に取り付けてある蛍光灯の光を反射して、その光が妖魔の目に当たった。

一瞬、妖魔が目当ててひるむ。

その一瞬の隙を見逃す和也ではなかった。

和也は立ち上がると、妖魔に立ち向かっていった。

「てええいっ！」

和也は神剣を構えると大上段から振り下ろす。

そして妖魔が断末魔の悲鳴を上げた。

和也は転がっていた神鏡を拾うと、妖魔に向け、妖魔が吸い込ま

れていった。

「…ふうっ…」

そして和也は大きくため息をついた。

「…終わったん、だね…」

そしてあたりを見回すが、別にこれと言って怪しい様子は無い。

そして和也は神鏡を見る。あの時、神鏡の光が妖魔の目に入っていないければ一体どうなっていたか…。

「…ハハハ、お姉ちゃんに助けられちゃったよ。まだまだ一人じゃダメなのかな…」

そして和也がポケットに神鏡を入れ、神剣を鞘に納める。

＊

そして階段を下り、美由の病室がある階に来たときだった。

「…？」

和也の目の前に一人の人物が立っていたのだった。

「…和也？ 和也なの？」

「お姉ちゃん。気がついたんだね！」

そう、目の前に立っていたのは美由だったのだ。

「気がついたって…。一体何があったの？」

「何がって…。お姉ちゃんあれから1週間も寝たままだったんだよ」

「1週間、って…。もうあれから1週間も経ったの？」

「まあ、詳しい話は後でするから。とりあえず病室に戻ろうよ」

＊

そして数日後、美由が退院の日を迎えた。

義和の迎えの車に乗り込む美由と和也。

そして車は病院の前を発車した。

和也は例の事件もあったからだろうか、いつまでも病院を見つめていた。

と、

「和也」

美由が話しかけてきた。

「…何？」

和也が聞き返すと美由は一言、
「強くなったね」

そう言うとき和也に微笑む。

（エピソードに続く）

・後編（後書き）

（作者より）この作品に対する感想等がありましたら「ともゆきのホームページ」BBS（<http://www.e.biglobe.ne.jp/~t-azuma/bbs-chui.htm>）の方をお願いします。

・エピローグ

(…思えば、あの日を境にしてなんかお姉ちゃんとオレの関係がちょっと変わったような気がするんだよね…)

そう、その和也が一人で妖魔を退治したあの日から、それまでの美由と和也の役割が変わったような気がしたのだ。

和也自身はそうとは感じなかったのだが、美由はおそらく和也が一人で妖魔を退治した、という事で安心したのであろうか、それまではどちらかというと和也が美由のサポートをするような立場だったのだが、しばらくしてまた二人でPBを始めた時にはどちらかというと美由が和也のサポート役に回ることが多くなってきたのだ。

そして和也が高校に上がったころには完全に美由がやることと言えば、妖魔退治に関する際の周りのことと、最後に妖魔を自分の持っている神鏡に封じ込めるくらいであとはすべてを和也に任せるようになったのだった。そして昨年の秋に和也に自分が結婚を決めたことと同時に妖魔退治に関するすべてのことを和也に任せる、という美由は現場を離れたのだった。

「…今にして思えばあつという間の5年間だったな…」

そう、自分が姉と組んでPBをやって5年半という月日が流れたのだった。それが長かったのか短かったのかはわからないが…

と、その時、和也の机の上の携帯電話が着メロを鳴らした。

「…? 誰だ、こんな時間に」

そう言いながら和也は電話を取る。

「もしもし」

「あ、和也?」

電話の向こうから少女の声が聞こえてきた。

「…なんだ、おまえか。一体どうしたんだ?」

「ああ、実は妖魔退治頼まれて、駅の前におるんやけれど、それが

どうもあたしひとりだけではかなわん相手のようなんや。…それだな、和也に助っ人頼もうか思っているんやけど」

電話の向こうから関西弁が聞こえてくる。

実は和也が大学に入って間もなく、生まれが大阪という一人の少女と知り合ったのだが、その彼女に自分と同じような「感覚」を感じたので和也がいろいろと話をしてみたところ、実は彼女も自分と同じ年齢のころに「覚醒」したPBだったという事がわかった。

そして彼女は高校を出るまで大阪でPBをやり、この春に上京し、大学に通う傍ら、こうやってPBをして生活費を稼いでいる、というのだった。

そんなある日、和也はその少女に頼まれて、助っ人という形で二人でPBをやったのだが、その日から彼女は時々こうやって和也に助っ人を頼むようになったのだ。

さすがに和也も相手が女の子、ということであげておけずに手伝っているのだが、その彼女、知り合ったころは和也のことを「瀬川くん」としおらしく呼んでいたのにいつの間にか「和也」と呼び捨てにしていたのだった。

もっとも和也も最初のころは「きみ」と呼んでいたのに、いつのころからか彼女のバイタリティに引き込まれたか「おまえ」と呼ぶようになっていたが。

「…おい、オレの姉ちゃんが明日結婚式だっていうのはおまえも知ってるだろう？ それに出なきゃいけないから、この間からPB休んでいたのに…」

「それはわかつとるわ。だからあたしだってここん所和也には助っ人頼まんかったんやけど、今回はちょっと一人じゃ厳しいんや。なあ、和也、お願い。こういうこと頼めるの和也しかおらへんのや。な？ いつも通りギャラは半分こにするから」

そう、さすがに彼女も一方的に和也を呼び出して悪い、と思って

いたのか、もらったギヤラは等分にして、半分を渡していたのだ。
和也は一度それで大丈夫なのか、と聞いたが彼女は「和也は他人のことは心配せんでええんや」と言っていたが。

「…わかったよ。じゃ今からそっちへ行くから動くなよ!」

「ありがと。じゃ、待ってるからな」

そして電話が切れる。

「…ふうっ。まったく手間がかかるんだから…。オレは便利屋じゃねえっての」

和也はそう呟きながら、部屋に置いてある神剣を取ると鞘から少し刀身を抜く。

祖父から父、父から姉、そして自分へと受け継がれた神剣の輝きはちつとも失われていない。

そして納得するかのように和也は刀身を収めると部屋を出て行った。

（終わり）

・エピローグ（後書き）

（作者より）この作品に対する感想等がありましたら「ともゆきのホームページ」BBS（<http://www5e.biglobe.ne.jp/~t-azuma/bbs-chui.htm>）の方をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2325j/>

Phantom Buster K～Phantom Buster MIYU Episode.EX～

2010年10月13日18時26分発行